

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02572

研究課題名(和文)カルチュラル・ヘミングウェイ 冷戦文化の政治学研究

研究課題名(英文)Cultural Hemingway: The Politics of Cold War Culture

研究代表者

塚田 幸光 (TSUKADA, Yukihiro)

関西学院大学・法学部・教授

研究者番号：40513908

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ヘミングウェイ文学と冷戦期の政治文化の交差を、メディア的視座から探る学際的試みである。

メディアは、如何に戦時の政治学に応答し、関係性を切り結ぶのだろうか。キュビストの絵画と前線の関係のように、メディアは文化の政治学の顕著な特徴であり、不可欠な要素なのは明らかである。この点において、アーネスト・ヘミングウェイのテキストは、戦時コンテキストの興味深い例となる。本研究では、メディア・イメージとその政治性がヘミングウェイ・テキストにおいて再想像/創造され、変容するインターテクスチュアリティを明らかにした。その結果、彼のテキストとその時代におけるクロスメディアの可能性を明確に示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ヘミングウェイ文学と冷戦文化の政治学を探る独自のものであり、複数ジャンルを横断するクロスメディア研究である。冷戦期の政府資料(議会図書館や公文書館等)、アカデミズムと文学、ドキュメンタリー映画や映像資料、『ライフ』などのフォトジャーナル、ヘミングウェイ関連の一次資料(ケネディ図書館)を融合、交差させ、政治と文化の共犯関係を例証し、キャンオン生成のメカニズムや文学のナショナリズム研究へと繋げることに特徴がある。その成果は、ヘミングウェイ研究の進展にとどまらず、冷戦の政治文化研究、映像の政治学、文化のイデオロギー研究に再考を促すと思われる。

研究成果の概要(英文)： In this research, I attempted to throw light on the relationship between Ernest Hemingway's literature and cultural politics, especially focusing on the media variation through the Cold War policy.

How has "Media" responded to and associated with wartime politics? It is clear that, like the relation between Cubist's paintings and the front line of the battlefield, mixed media is its unique characteristic of cultural politics and indispensable factor. In this light, Ernest Hemingway's texts are an interesting example of wartime contexts. I clarified the intertextuality in which media images and its politics are reimagined and transformed into the Hemingway's texts. And this view opens up new possibilities whereby the Hemingway's writing may be reconsidered in its "cross-media" dimensions.

研究分野：英米・英語圏文学

キーワード：クロスメディア ヘミングウェイ アメリカ 冷戦 政治文化 表象文化 映画 ナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

アメリカという主体の「文化」生成を考える際、冷戦構造が与えた影響関係は無視できない。とりわけアメリカとキューバの「国民作家」、アーネスト・ヘミングウェイの政治的「立場」は重要である。スペイン内戦(1936-39)を経験し、ファシズムを告発し(全米作家会議「ファシズムの嘘」1937)、左翼思想に接近したこの作家は、カストロから見れば、反植民地主義革命を代表/表象する存在に他ならない。だが、その十数年後、フォトジャーナル『ライフ』は、ナショナルな「パパ・ヘミングウェイ」を特集し、彼の左寄りの文学は、非政治的にリセットされ、『老人と海』(1952)の全文掲載でノーベル賞受賞へと邁進する。ニューディールのマッチョな左翼のパパから、冷戦期のナショナルなパパへ。反米と反共が、ガルフ・ストリームを挟み、乱反射する。相反する「パパ」は、ヘミングウェイと冷戦の複雑な位相を代弁するのだ。

アメリカとキューバという複層的な関係性のなかで、ヘミングウェイ文学は政治化され、網状のコンテクストを形成する。しかしながら、その複雑さに対し、ヘミングウェイ批評は十分な成果を上げているとは言えない。文学研究の陥穽。それは「文学、文化、メディア、政治」という分野の壁が、研究の学際性を削ぎ、クロスジャンル、クロスメディア研究の足かせになっている点に顕著である。作家論や作品論中心の読みに対して、文化研究やイデオロギー研究は有機的な批評に結実していないからだ。とりわけ、ヘミングウェイ文学と冷戦の関係は、批評の空白地帯と言えるだろう(皮肉にも、一般的な冷戦文化研究は充実している)。例えば、左寄りで見なされていたヘミングウェイが、何故ノーベル文学賞を受賞できたのだろうか。ロックフェラー財団と国務省、大学と出版業界、そして知識人が、冷戦イデオロギーの渦中で共闘し、国民作家を作り出す。メディアと政治は共犯関係を切り結び、文化は限りなく政治に接近するのだ。この状況において、ウィリアム・フォークナーやヘミングウェイの文学が「非政治的」にリセットされ、ナショナルな神話として書き換えられた経緯は重要である。如何に文化を創り出し、それを政治へと昇華、接続するのか。これこそが成熟した「知」を求める国家のセカンド・ターゲットだろう。だからこそ、「パパ/ヘミングウェイ」は二重化する。パクスアメリカナの「パパ」は、メディア・イメージそのままにアメリカを体現し、そのテキストの「老人」は冷戦の不穏さを逆照射する。しかしながら、このような政治文化的な考察は、ヘミングウェイ研究の現状としては周縁的であり、異端と言わざるを得ない。

以上のような背景、つまりヘミングウェイ文学と冷戦期の複層的な関係性に対し、政治文化とメディアという視座から考察する必要が生じた。

2. 研究の目的

本研究は、科研費「基盤研究(C)」(H26～28)で行ったケネディ図書館(John F. Kennedy Presidential Library)のヘミングウェイ・コレクションでの調査やアメリカ議会図書館等における実証的研究(ニューディール政治文化研究)を補完し、冷戦期の政治文化研究へと接続、敷衍することに加え、その文化生成の痕跡を辿る独自のものである。特に、議会図書館・公文書館における政府文書と映像資料、ケネディ図書館のヘミングウェイ資料、『ライフ』や『ケン』に顕著なフォトジャーナル資料など、クロスメディア的視座から文化と政治の共犯関係を例証・考察し、文学・文化のナショナリズム研究やイデオロギー研究へと接続する点に特徴がある。

文学テキストを網状のコンテクストとの関係において考察することは不可欠である。クロスジャンル、クロスメディア的思考は、広義の文化研究やアメリカ研究に必須であり、文学の可能

性を広げるオリジナルな視座となるからだ。この意味において、本研究は、従来のヘミングウェイ研究の更新にとどまらず、映像やジャーナルなどのメディア研究や、冷戦文化の研究に再考を促すと思われる。

本研究で実践するのは、ヘミングウェイ文学と冷戦文化の関係性の考察であり、一次資料やジャーナルなどを踏まえたクロスメディア研究である。具体的には、(1) アメリカ合衆国議会図書館・公文書館等の冷戦文化・映像資料、(2) ケネディ図書館ヘミングウェイ・コレクションの一次資料、(3) 『ライフ』などのジャーナル資料の研究考察である。これらを連動させることで、冷戦文化の生成メカニズムを再検討し、ヘミングウェイとの関係性において新たな解釈を目指す。ニューディールから冷戦期に至る文化生成の痕跡を辿ることで、文化の政治学を考察する。

まず、アメリカ合衆国議会図書館 (The Library of Congress)、アメリカ合衆国公文書館 (National Archives)、ハーバード大学図書館では、冷戦文化に関する政府資料、写真・映像資料を分析調査する。議会図書館・写真版画部門の写真資料、公文書館のプロパガンダ・ドキュメンタリー映像資料を通じて、政府文書との関わりから、冷戦文化の生成メカニズムを考察する。アメリカ合衆国ケネディ図書館では、ヘミングウェイの一次資料を中心に調査する。特に、冷戦期に注目し、1950年代を軸に、一次資料を精査する。

そして、フォトジャーナル『ライフ』、『ケン』、『プラウダ』などのフォト・ジャーナルに関しては、国内外を問わず多角的に調査する。この調査は、議会図書館等の一次資料研究を補完し、冷戦文化、文学、映像等のクロスメディア的視座を強化する。メディアと政治が、冷戦イデオロギーの渦中で変容するプロセスを探ることを目的とする。

本研究は、ヘミングウェイ文学と冷戦文化の政治学を探る独自のものである。冷戦期の政府資料(議会図書館や公文書館等)、アカデミズムと文学、ドキュメンタリー映画や映像資料、『ライフ』などのフォトジャーナル、ヘミングウェイ関連の一次資料(ケネディ図書館)を融合、交差させる。このようなクロスメディア、クロスジャンルの視座、言い換えれば、ヘミングウェイ文学研究の「周縁的」な要素から、その本質を逆照射する点に特徴がある。その結果、政治と文化の共犯関係を例証し、キャンオン生成のメカニズムや文学のナショナリズム研究へと繋げることに意義がある。

3. 研究の方法

本研究で実践するのは、ヘミングウェイ文学と冷戦イデオロギーの関係性の考察であり、その文化の政治学を見出すことである。具体的には、アメリカ合衆国議会図書館等の冷戦文化に関する資料研究、ケネディ図書館ヘミングウェイ・コレクションの一次資料研究、『ライフ』などのジャーナルや冷戦映像・写真資料の考察である。例えば、『ライフ』の右傾化とヘミングウェイのメディア・イメージの「書き換え」などは、これらの研究を連動させないと見えてこない。

ケネディ図書館での調査はヘミングウェイの「声」を辿る実証研究であり、議会図書館、公文書館での調査は、冷戦の文化戦略を再検討する複合的な調査である。特にジャーナルやレター等、未出版の資料を軸に調査を進める(例えば、現在出版されている総948頁の『ヘミングウェイ書簡集』(*Ernest Hemingway Selected Letters*)は、全書簡の一部に過ぎない)。コピー不可の資料も多く、現地での複写とパソコンへのデータ(直接)入力が不可欠である。ケネディ図書館の再訪では、資料調査の連続性を保つため、再度ヘミングウェイ・キュレーターの Susan Wong の助力を得る。それ以外でも、ヘミングウェイ研究者の友人たちとボストンで入手した資料をシェアし、共同研究することで、研究の効率化を図る。

アメリカ合衆国議会図書館モーション・ピクチャー部門のカード・カタログ並びに映像資料と、公文書館アーカイブの映像資料は、映像文化研究には不可欠である。議会図書館の資料はデータベース化されているため検索が容易だが、公文書館のデータベース(NAIL)ではその全容をウェブで知ることはできない。冷戦文化のプロパガンダ資料に集中しながら、アカデミズムと政治の交差に関して、資料調査を行う。そして、ハーバード大学図書館での調査も重要である。世界屈指のデータベースと収蔵量を誇る一連の図書館の調査では、ライシャワー研究所との連携を保ち、依田富子教授らの助力を仰ぐ。そして、米国ヘミングウェイ協会(International Hemingway Society Conference)など、海外の学会に積極的に参加し、研究者と交流し、情報を得ることで、海外での調査に役立てる。

『ライフ』や『ケン』などのフォト・ジャーナルや冷戦映像・写真資料の調査に関しては、国内にある1940年代から50年代の冷戦初期の資料に集中し、ヘミングウェイ文学と冷戦文化との政治的関連図を整理する。アカデミズムと政治、冷戦文化のイデオロギー、メディア・プロパガンダ等、激動の時代におけるヘミングウェイ文学の付置と文化の役割を再考察する。

ヘミングウェイ文学と冷戦文化の交点を探る試みは、複数ジャンルを横断するクロスメディア研究ゆえに、緒に就いたばかりである。本研究は、ケネディ図書館、議会図書館、公文書館等での実証研究を踏まえ、ヘミングウェイ、冷戦、メディアとの政治的・文化的交差を探るオリジナルな研究である。この成果は、ヘミングウェイ研究の進展にとどまらず、冷戦の政治文化研究、映像の政治学、文化のイデオロギー研究に再考を促すと思われる。

4. 研究成果

本研究では、ヘミングウェイが生きたモダニズム/ファシズムの時代から冷戦期を軸に、テキストとコンテキストから見えてくる文化の政治学を考察した。テキストとコンテキストは如何に交差し、相補的に関係するのだろうか。ジャーナル、フィルム、フォトグラフ、アート、そしてノベル。これらのメディアを通して見えてくるヘミングウェイのテキストとは如何なるものなのかに焦点を当てた。従来の文学研究とは異なる視座で、ヘミングウェイのテキストを捉え、アメリカ文化の政治学を再考した。この成果は、3年間で、2編の査読有り投稿論文、7冊の図書(1冊の単著、1冊の編著、5冊の共著)、5件の国内外の学会報告に結実している。

(1) ヘミングウェイ研究

ヘミングウェイ研究に関して、この3年間で最大の成果は、単著『クロスメディア・ヘミングウェイ アメリカ文化の政治学』(小鳥遊書房、2020年)の出版である。メディアと政治の交差に関して、ヘミングウェイ文学を別角度から検討し、アメリカ文化研究の更新を試みた。また、学会誌『ヘミングウェイ研究』に寄稿した論文「クロスメディア・ヘミングウェイ—ニューズリール、ギリシア・トルコ戦争、「スミルナの棧橋にて」—」では、ニューズリールとジャーナル記事、そして短編の連続性・相補性を論じた。そして、パリのアメリカン大学で開催されたヘミングウェイ国際会議において、研究発表“Framing/Filming Hemingway: Wartime Politics in *To Have and Have Not*”を行い、戦時下のプロパガンダ映画の政治性について議論した。筑波大学が主催した国際シンポジウムではパネリストの一人として、研究発表“Smyrna Revisited: Hemingway and Cross-Media in the 1920s”を行った。

(2) ニューディール研究

ニューディール研究に関しては、共著書『スタインベックとともに 没後五十年記念論集』(大阪教育図書、2019年)に寄稿した論文「ドキュメンタリー・アメリカ—ニューディールの文化生成と『怒りのぶどう』の政治学—」において、1930年代のスタインベック文学とニューディールとの交差を論じた。加えて、共著書『アメリカン・モダニズムと大衆文学 時代の欲望/表象をとらえた作家たち』(金星堂、2019年)には、論文「「大衆」とフォト・テキスト—ニューディール、エイジー、文化の政治学—」を寄稿し、写真家ウォーカー・エヴァンズと小説家ジェームズ・エイジーの共著フォト・テキスト『我らが有名人を讃えよう』(1941)におけるテキスト/コンテキストの分析を行った。そして、フォークナー協会の学会誌『フォークナー』には、論文「『ライフ』・ナショナリスティック—ヘミングウェイ、スペイン、ニューディール「南部」—」を寄稿した。フォトジャーナル『ライフ』とニューディールとの関係について、ヘミングウェイを軸に論じている。研究報告では、アメリカ文学会ワークショップのパネリストとして、「ニューディール・クロスメディア—スタインベックと「大衆」文化の政治学—」を行っている。

(3) 映画/映像研究

映画研究としては、編著『映画とジェンダー/エスニシティ』に論文「ハイブリッド・エスニシティ—エドワード・ズウィック『マーシャル・ロー』と文化翻訳の可能性—」を寄稿した。ここでは、9.11テロを予見する映画『マーシャル・ロー』(1998)を軸に、アメリカとイスラムの共存と反発、その文化翻訳の可能性について論じた。共著書『ヒッピー世代の先覚者たち 対抗文化とアメリカの伝統』(小鳥遊書房、2019年)には、論文「デッド・エンド、バッド・シーズ—『ボディ・スナッチャー/恐怖の街』と対抗文化の政治学—」を寄稿した。ここでは、1950年代の冷戦と反共とSFの交差に関して、ロボット手術をキーワードに論じている。さらに、共著書『路と異界の英語圏文学』(大阪教育図書、2018年)には、論文「イメージの異境—『パリ、テキサス』とアメリカ的風景の変容—」を寄稿した。映画『パリ、テキサス』(1984)において、西部の神話的ランドスケープが如何に構築、解体されているのかに関して、アメリカ風景の文化生成について議論した。そして、研究報告では、サンチアゴのディアゴ・ポルタレス大で発表した“Danchi, Emperor, Terrorism: Nuclear Landscape in the Japanese Films”がある。団地と天皇とテロリズムの交差に関して、映画『太陽を盗んだ男』(1979)を軸に論じた。

(4) 比較文学・文化研究

最後に、文学・文化一般に関して、共著書『授業力アップのための英語圏文化・文学の基礎知識』では、「政治制度」の項目を解説した。また、研究報告では、米国サウスイースト・ミズーリ州立大で開催されたフォークナー/マルケス会議で、発表“*Invisible Ethnicity: Faulkner and Garcia Marquez's Mexican Connections*”を行った。フォークナーとマルケスの知られざるメキシコとの関係について、比較文学の視座から論じた。

上記のように、ヘミングウェイ文学、ニューディール関係、映画研究、文学・文化関係など、多角的な視座からクロスメディア研究を推進した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 塚田幸光	4. 巻 21号
2. 論文標題 『ライフ』・ナショナリスティック ヘミングウェイ、スペイン、ニューディール「南部」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フォークナー	6. 最初と最後の頁 108-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚田幸光	4. 巻 第18号
2. 論文標題 クロスメディア・ヘミングウェイ ニューズリール、ギリシア・トルコ戦争、「スミルナの棧橋にて」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本ヘミングウェイ協会『ヘミングウェイ研究』	6. 最初と最後の頁 61-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 3件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Yukihiro TSUKADA
2. 発表標題 “Framing/Filming Hemingway: Wartime Politics in To Have and Have Not”
3. 学会等名 Hemingway in Paris: XVIII International Hemingway Conference（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yukihiro TSUKADA
2. 発表標題 “Invisible Ethnicity: Faulkner and Garcia Marquez 's Mexican Connections”
3. 学会等名 Faulkner and Garcia Marquez Conference（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 塚田幸光
2. 発表標題 ニューディール・クロスメディア スタインベックと「大衆」文化の政治学
3. 学会等名 第57回アメリカ文学会全国大会ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yukihiro TSUKADA
2. 発表標題 "Smyrna Revisited: Hemingway and Cross-Media in the 1920s"
3. 学会等名 筑波アメリカ文学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yukihiro TSUKADA
2. 発表標題 "Danchi, Emperor, Terrorism: Nuclear Landscape in the Japanese Films"
3. 学会等名 Knowledge/Culture/Ecologies International Conference（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 塚田幸光、清水知子、小原文衛、吉村いづみ、山本佳樹、羽鳥隆英、キンバリー・イクラベルジー、久保豊、紙屋牧子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 284ページ
3. 書名 映画とジェンダー／エスニシティ	

1. 著者名 藤野功一、早瀬博範、高橋美知子、千代田夏夫、中村嘉雄、樋渡真理子、塚田幸光、永尾悟、山下昇	4. 発行年 2019年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 300ページ
3. 書名 アメリカン・モダニズムと大衆文学 時代の欲望 / 表象をとらえた作家たち	

1. 著者名 塚田幸光、木原健次、中島美智子、中垣恒太郎、鈴江璋子、馬渡美幸、加藤好文、山内圭、金谷優子、田村亮、大須賀寿子、酒井康宏、久保田文、高平有希、金子淳、林ひふみ	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大阪教育図書	5. 総ページ数 403ページ
3. 書名 スタインベックとともに 没後五十年記念論集	

1. 著者名 森有礼、小原文衛、土屋陽子、社河内友里、塚田幸光、クリストファー・アームストロング、細川美苗、矢次綾、小林英里、杉浦清文	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大阪教育図書	5. 総ページ数 243ページ
3. 書名 路と異界の英語圏文学	

1. 著者名 中山悟視、小椋道晃、亀山博之、貞廣真紀、大森昭生、井出達郎、舌津智之、村上東、飯田清志、塚田幸光、中垣恒太郎、白川恵子、藤井光	4. 発行年 2019年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 328ページ
3. 書名 ヒッピー世代の先覚者たち 対抗文化とアメリカの伝統	

1. 著者名 塚田幸光	4. 発行年 2020年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 306ページ
3. 書名 クロスメディア・ヘミングウェイ アメリカ文化の政治学	

1. 著者名 江藤秀一、鈴木章能、塚田幸光	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 324ページ
3. 書名 授業力アップのための英語圏文化・文学の基礎知識	

〔産業財産権〕

〔その他〕

関西学院大学法学部 https://www.kwansei.ac.jp/s_law/s_law_000007.html 関西学院大学法学部 https://www.kwansei.ac.jp/s_law/index.html
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考